

第8期美術館運営協議会答申書

「新しい時代の美術館運営について」

平成28年8月

府中市美術館運営協議会

第8期府中市美術館運営協議会答申 「新しい時代の美術館運営について」

1 はじめに

私たち美術館運営協議会は、平成26年11月から2年間に渡って計4回の審議を重ね、事務局の報告を聞くとともに、府中市美術館の新しい時代の美術館運営について協議してきた。平成12年に開館した府中市美術館は、この16年間あまり「生活と美術 - 美と結びついた暮らしを見直す美術館」を基本テーマとして、年5回の展覧会を開催し、地域美術館として美術鑑賞教室、公開制作、アートスタジオなど多くの教育普及事業も積極的に推進してきた。市民ニーズに対応しながら、「深く、面白くて、地域に愛される美術館」であるためには、運営面での課題を検討する必要がある。そこで、諮問された「新しい時代の美術館運営」というテーマを通して、府中市美術館の今までの運営を振り返り、今後の運営についてのあり方を探り、ここに提言する。

2 教育普及事業について

(1) 子どもに対するアプローチ

小・中学校との連携については、これまで10年間以上「美術鑑賞教室」を学校及び教員との連携で実施し、大きな実績をあげてきており、評価されるべきと考える。今後は、鑑賞した児童にとって、どのような教育効果があったのかという成果検証ができると良い。これだけの事業を実施しているので、府中市の児童には感性を高め効果があると期待される。学校と協力して、それを何らかの形で評価をする時期ではないだろうか。

この美術鑑賞教室は、児童が作品を深く理解し、楽しみ、作品について話し合うことのできる場である。また一方で、静かに作品を鑑賞する態度や、美術作品保護の観点から定められた距離を保って作品を眺めるなどの、ルールやマナーを学ぶ場所でもある。多くの児童が一度に鑑賞するため、ある程度の音が出てしまうのはいたしかたないが、他の来館者に対しての周知を行い、理解を得る必要があるだろう。

重要なのは、府中市に住んでいることで美術作品を何度でも見られることだ。子どもの時に美術鑑賞教室で見た作品を、大人になってから再度見ると、感じ方が異なることもある。そういった自分の考え方の変化、自身の成長を、府中市美術館で実感できればよいと思う。

夏の企画展については子ども向けというイメージが定着しているが、府中市美術館では美術作品が大人の鑑賞にも耐えうるよう、しっかりと展示されている。点数は少ないながらも、幅広い作品が展示されており、解説もきちんとしているのは評価できる。また、ワークショップも充実しており、来館者もそれを期待している人

が多いのだろう。

しかし、ひとくくりに子どもと言っても、例えば小学校低学年と中学生ではまったく異なり、展示方法、とりわけ解説については年齢や成長に応じた対応が必要である。また、どの年代をターゲットにするかで展示方法が変わってくるだろう。年度によって重点を置く年齢層を変えるのか、あるいは児童の年齢層を幅広く捉えて実施していくのかなどを検討してもらいたい。

(2) 大人に対するアプローチ

府中市美術館はマネ展やミレー展などの巡回展だけでなく、個性的な独自の企画展を開催しており、来館者数の推移からもその成果が見られる。企画展だけではなく、アートスタジオを始めとしたワークショップも1日に100人を超す参加者があるなど、他の事業も充実している。それらを踏まえ、これからの美術館運営を考えるにあたり、いくつかの提言をしたい。

まずは、開館から16年が経過し、開館当初に美術鑑賞教室で来館した児童もすでに成人している。市内小中学校の協力を得て、有志の卒業生を集め、今現在の府中市美術館をどう感じているか、当時の経験が現在にどう生かされているのか、という意見交換や収集を行う場を設けるのも、これからのありかたを考える材料として有効ではないだろうか。

つぎに、青少年や成人の引きこもりや心の病に対して、自分たちで何かを作る体験が効果的だという。作るという行為が、自分の内にあるものを表出し、他者との関わりを持つ上で重要な役割を果たすと考えられる。また外出することで物理的に外界との関わりをもつことにも影響するのだろう。現実を通して何かを見て考えるという生活の中に、アートスタジオ事業を関係させていくことができないだろうか。引きこもりや心の病の問題に関して、美術館や生涯学習施設が提供できることは数多くあるだろう。しかし、それが美術館として進める内容か、市が事業として実施すべきものなのかについては、今後、慎重に検討していく必要がある。美術館の機能を活用することは有意義と考えられるので、NPOなどと協力して実施するというのが現実的ではないだろうか。府中市も市民協働を進めているところでもあるので、実施を推進している関係団体と連携しながら進められるよう今後の検討が必要だと考えられる。

そして、現在のアートスタジオは子ども向けの印象があるが、今後の高齢社会を考えると、より幅広い層に目を向ける必要があると思う。中高生を対象としたワークショップや大人向け、特に定年退職後の世代向けのワークショップの開催を検討してみてもよいのではないか。さらにその場合、大人向けのワークショップは、平日に開催すれば、平日閉まっている創作室の有効活用にもつながるだろう。

3 美術品購入について

美術館があるのに作品購入費が無いのは問題である。作品購入は美術館にとって大事な使命であり、是非少しずつでも購入を進めていってほしい。購入しない期間が長くなると、美術市場の情報が入ってこなくなってしまう、結果として、府中市美術館で収集するのに相応しい作品の市場相場がどのくらいなのか、そもそも現在市場に出回っているのか、という重要な情報が得られなくなるという危惧がある。

市民としては、永続して収集した作品を継続的に展示室で見られることを楽しみにしており、購入予算がつくことを期待している。また、寄付金の受け入れについても柔軟に対応できるような制度作りや、基金の創設を希望する。

4 効果的な広報・宣伝について

展覧会の企画を成功させるためには、広報・宣伝が重要であることは誰もが認識をしている。せっかく良い内容の展覧会であっても、広報・宣伝で広く伝わってこないことは残念である。しかし、府中市美術館が、都内の大規模美術館のマスコミ主導の展覧会のような派手な広報・宣伝を行う必要もないと考える。地域社会に根ざした親しみのある美術館という基本的性格からしても、多摩地域の公立美術館としての効果的な広報・宣伝を模索する必要があるだろう。現在、行っている京王線等に掲出しているポスターや車内広告についても、効果的な掲出場所や時期・タイミングを考えることにより、さらに効果が期待できる。また、有料広告だけでなく、新聞や雑誌、美術誌、テレビなどに地道な情報提供を行い、取り上げてもらうことにより、経費をかけずに大きな広報・宣伝効果が見込める。ホームページやメールでの情報提供が行われているが、現在の美術館ホームページは魅力的とは言えず、また、府中市のメール情報配信システムでは画像の添付ができないため、視覚的に惹きつけることもできない。近年の携帯機器の普及に伴い、SNSの利用率も非常に高いので、府中市美術館でもSNSの利用を検討すべきではないだろうか。その他、新しい広報・PR手段・媒体ができてきているので、それをどのように活用するかも検討を必要としている。さらに、展覧会の評判になるようなキャッチフレーズや市内掲示板、駅からの案内板の整備など見直しが必要な箇所も多い。費用対効果を十分検証し、府中市美術館らしい広報・宣伝を効率的に行っていただきたい。

5 開館20周年に向けて

府中市美術館の開館20周年の年は、奇しくも東京オリンピック・パラリンピックの開催年と同じ年である。オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典だけでなく、文化の祭典でもある。世界中から観覧者が来る機会でもあるので、府中の画家を世界に宣伝するいい機会であろう。これまで知られていない画家について、英語などの外国語で発信できれば、興味を持つ外国の方が出てくると思う。ただ、

オリンピックは華やかな行事ではあるが、府中市美術館はそういった華やかな部分だけではなく、素朴なものも忘れずにいて欲しい。

近年ワークライフバランスが定着しはじめ、今後は趣味活動を充実させるため、開館時間の延長などの要望も増えることが予想される。手法によっては来館者の増大を期待できるところではあるが、立地上美術館単体で実施しても効果は薄いようにも感じられる。費用対効果をしっかり検証して、公園全体としての対応が望ましい。

また、現在のカフェとショップは、利用者側からみると決して満足できるものとはいえない。どこの美術館でもカフェとショップについては、悩みどころではあると思うが、公立と私立とでは全く違う状況にあるようにも思う。改修して利便性を高めることが望ましいが、営業時間の延長なども含め、さまざまな工夫をこらして利用意欲の向上を図ってもらいたい。

もし、今後來館者の増や開館時間の延長などを考えるのであれば、交通の面において路線バス等の増便や共通利用している臨時駐車場の拡充が必要と考える。現在府中基地跡地留保地の活用の検討がされているが、是非、美術館専用駐車場の設置をしてほしい。駐車場やバスなどの交通のアクセスについては、すぐに解消できる問題ではないと思うが、東京オリンピック関連予算でハード面の対応も検討できるのではないかと期待する。それまでは、ホームページ等で分かりやすいアクセスの周知に努めてほしい。

さらに、美術館本体の施設整備についても検討が必要ではないだろうか。エントランスの表示多言語化や、空調設備の改修など、公共施設や他の美術館では築30年前後で、設備の老朽化や故障などにより全面改修を行っているが、府中市美術館では20周年やオリンピック・パラリンピックの開催に併せてそういった改修をおこなってもよいのではないかと考える。

6 多摩地域のネットワークについて

これからの美術館のあり方として、ネットワークの組み方が非常に大事ではないだろうか。地区ごとに設置された美術館で、相互に協力できることは多いと思われ、その充実は重要であると考え。多摩地域は今後のインフラ整備に伴い、多様な交流の広がりや可能性を秘めているので、具体的に考えていかなければならないだろう。しかし、美術館は館ごとにそれぞれ個性をもっており、公立・私立という性格の違い一つをとっても、役割や機能に差異がある。従って、共有部分の少なさから、連携・協力の難しさは否めない。しかし、だからこそ、相互に連携を図り、まとまることの意義は深いと感じている。今後、府中市美術館が一つの核になりながら、多摩地域の基幹館としてネットワークの形成を牽引できることを期待したい。

7 おわりに

府中市美術館の企画展は、質の高いものが多く、多彩な活動をしていると委員全員が感じている。2020年は府中市美術館開館20周年にあたり、培ってきたものの集大成として、多摩の美術風土を前面に押し出す企画と、国際的な大型企画展を実施したいという話が事務局よりあり、実に府中市美術館らしいあり方だと共感できた。場所についても、府中の森公園内にあり、緑に囲まれた美術館として、独特の存在感を示しているということで、これからも様々な可能性が見えてくるだろう。

美術館とは、学校や病院と同じで、「あるかないか」ではなく「なくてはならないもの」だろう。利用する市民が、なくてはならないものだという気持ちで一生涯懸命応援することが、この美術館を良くすることである。

多くの人に来てもらう美術館となるためには、それなりの努力が必要であり、協議会の中で議論された様々な意見に耳を傾け、できるところから積極的に取り組んでいってほしい。

それを期待して、ここにこの答申書を提出する。

平成28年8月25日

府中市美術館運営協議会

会 長	薩 摩 雅 登
副会長	谷 矢 哲 夫
委 員	大 杉 健
委 員	中 村 一 哉
委 員	西 郷 美 絵
委 員	米 谷 一 志
委 員	隠 岐 由紀子
委 員	吉 田 裕 子
委 員	堀 江 一 男
委 員	清 水 正 人
委 員	金 津 道 子
委 員	佐 藤 静 夫